

松田川の魚

～酒井明 説話集22※～



松田川も以前と比べるとなんと汚れてきたもんだ、そう思う人は多いでしょう。こちら辺でなんとかせんといかんとは思うものの、ひと月やふた月で片が付く事ではないので、なかなかおいそれと手が出せん。

それでもまだ、あれこれいろんな魚が生きてくれているのだが、地元の人たちの川魚に対する関心は薄いようだ。

利用されるのは、アユかうなぎかエビ、カニ位で、鯉じゃウグイじゃナマズというのは、ごく一部の人が利用する位のもんでしょう。白バヤと呼ばれ、本当はオйкаワというが、わざわざ九州の方から釣りに来る人はおっても地元の人はずしらん顔というところ。

水はまだ冷とうても日一日春の気配が深まってくると、ウグイが産卵の場所を探し始める。ウグイいうてもぴんとこん人でもイダというたらあれかという。

これも色々なのがあって、片島の港の中でようけ釣れるのもあれば、上の方だけで暮しているのもある。冬場味のええのは上流におるもので、これが春先卵を産む。

昔は切り出す材木や焼いた炭などを、あらかた馬で道まで運んでいた。川の瀬は朝晩山への通り道になるため、小石のこけはひずめできれいに落とされ、彼等が卵をつけるのに絶好の場所になっていた。

炭小屋にト網がかけられ、いつでもうてる様に構えられる。

イダがたつ。産卵のため集まったイダの群れ。それが、たちいだ。イダの上にイダが乗って、それこそ水の中にはいられないで空中で跳ねるのもあるくらい群れになることもある。

来たぞう、と誰かが言えば、みんなすぐに分かる。

ひと網うてば晩の魚には有り余る。誰彼なしに集まってのご馳走である。

もうすぐ春。四季折々の山の暮しのひとコマでもある、たちいだの時期がやってくる。

しかし、たちいだの味を知る人はこの頃少なくなってしまった。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。